

私の家族

アレクサンドロフ・タカコ

今年の四月、七十四才になる母が脳内出血で倒れました。

脳と心臓の両方に出血がみられ、集中治療室に運ばれました。生命の危険が医師より告げられ、一時は覚悟を決めていたが、奇跡的に一命をとりとめ、脳も心臓も手術することなく快復するに至り、意識も戻りました。

一般病棟に移った母は、老いたか細い身体をベッドに横たえていた。のどを切開して呼吸器をとりつけ、しゃべることもできず、左半身にマヒが残ることになった姿は痛々しかった。

―ああ：これから死ぬまで車椅子の生活になるのか：

不思議と悲しみの涙は一滴もこぼれず、：まあ：なんとかなるでしょう：と、いたって楽天的に現実を受けとめる自分がありました。

倒れてからの2ヶ月あまり、一人暮らしをしている東府中の家から、片道二十分、往復四十分の道のりを自転車で病院まで、それこそ雨の日も欠かさず、くる日もくる日も通所している作業所が終わると、毎日かよったものでした。

絵画教室の先生から、「お母さん思いたねえ」と言われ、はじめて、へえ？ そうなのかな：？と、自分を認識してしまいました。はじめの頃は気が動転してしまい、自分に何が起こっている

のか、まったくわからず、ただただ、絶望にうちひしがれていました。

倒れる数ヶ月前に、銀行でお金を移しかえた際におろしたという二万円を、今までそんなことしたこともなかった母が、おこづかいとして「大切に使いなさいよ。」と、私にくれました。

母がこん垂状態で生死の境をさまよっている時、私は、母の為に何か私にできることはないだろうか？と考えあぐね、せめてもの母への恩返しとして、近くの大国魂神社に、その二万円のうち一万円おさいせんとして出し、以前から顔を出していた教会にも一万円献金しました。（節操ないとお思いでしょうが、私は無宗教で、イエス・キリストもおしゃか様もブツダも、地球上のあらゆる全治全脳の神をすべて信じていて、木や空や雲や、海や山や大地、宇宙のすべて、これら自然のすべてが神だと信じているので。）

母は救われました。：天の神に私の想いが通じたのか…？

：思い起こせば過去、いろいろとあつれきや確執のあつた母でした。

小さい子供の頃、テレビのある居間に、私と姉のベッドがあつて母はテレビのすぐ下にふとんをしいて寝ていました。

寝ながらテレビを見ているので、夜中の五時頃までつけっぱなしになっており、光線や音でよく目が覚めてしまい、母がいびきをかいて寝ているので消すと、「なんで消すのよ！余計な事するんじゃない！」と、ガバツと起き上がってまたつける…といったことが毎日くり返されました。私は寝不足になって、毎晩耳をふさいで涙を流しながら浅い眠りのまま、小学校にかよつたもの

でした。

一緒に買い物に出かけた時、買い物カゴを、置き場所に戻さないなど、そういう母に、しだいに反発を感じるようになっていった私は、「なに、陰湿な顔して…。」と、憎々しげにののしられるようになり、ますます母が嫌いになり、憎むようになっていってしまいました。

うちでかえしたインコのひなが、ずい分大きくなって、死んでしまった時も、その死がいを土に埋めてあげず、ゴミと一緒に捨ててしまうこともありました。

二年前の日付の肉が、冷蔵庫の中でひからびていることなんて、しょっ中だったし、(その肉を食べさせられていました。)腐りかけたすっぱいおみそ汁をのまされることもありました。

オフロも、十日以上もわかしてもらえないこともザラでした。

我が家は、明日の食糧もままならないほどの貧乏というわけではなかったのに、いつもなかなか新しい下着を出してもらえず、ボロボロになった穴だらけの下着をいつもはかされていたし、つぎはぎのペチコートをはかされていたので、学校の体育の時は、級友に見られないように着がえるよう、気を使わねばなりませんでした。

私が恵まれない国に募金をすれば、「そんなこと国がちゃんとやっているんだから、あんたがそんなことする必要はないんだ！自分のこともちゃんときないくせに、余計なことすんな！！」とこちらがびつくりするほど、烈火のごとく怒られました。

…そんな母が、大嫌いでした。

よく、「馬鹿野郎！」くそばばあ！」「あんたなんか死んじゃえばいい！」と、なじったものです。母を憎んでいました。

父方の、痴呆症になった祖母を、我が家に引き取って同居していた時、大便のかけらをティッシュにのせて、わざわざ見せに来る祖母に、母はキレて激怒し、食べ物も最小限のものしかあげず、夜、まっ暗になっても、祖母の部屋の電気をつけてあげないで、私がいくら電気をつけるように言っても「うるさい！」と聞き入れてくれない母でした。

…が…、それでも下の世話を、毎日きちんとみていた母でもありました。

母もつらく、その苦勞と苦しみは、はかり知れないほど、大変であっただろうと思います…。しかし、祖母もまた、かわいそうでかわいそうでならなかったものです。

毎日、申し訳なさそうに、食べ物や口を運んでいた祖母の姿が、今でもはつきりと思ひ出される時…。私は、なんとも、もの悲しく淋しく、あわれに思い、心の中で泣いています…。

母にも祖母にも、何もしてあげられなかった…。私は本当に無能で無力でした。

母に対しての憎悪…。しかし、年月がたち…母は年老いて、私も四十二才になりました。最近になって、母が、私名義で銀行に二百万貯金してくれていることを知りました。

中学、高校時代は、毎日欠かさずお弁当を作ってくれました。

専門学校を中退したあと、美術系の短大に通わせてくれたり、好ざんまい、したい放だいをさせてくれました。

部屋のベッドの上で、両手で顔をおおいながら、「生きていたくない！生きていたくない！」と、泣きながら、何度も何度も絶叫した時も、かけ込んできてくれて、「たあちゃん、たあちゃん、そんなこと言わないで。ママがいるよ。」…と、両手で抱きしめてくれた…そんな母でもありました。

過去にいろいろな確執のあった母ではあるけれど、今にして思えばもうそれらは過去のこと…人間は、長所も短所も両方を持ち合わせているものであり、誰しも欠点があり、あやまちを犯す生き物。私の母だって例外ではありません。…そう思えば、母のあやまちも許してあげられるようになったのです。

—母も、完璧な神ではありえない、欠点だらけの生身の人間なのだ…ということ。最近にして、やっとそういう思いに至れるようになりました。

姉は、わがままで性格もきつく、トゲトゲしい人でした。

子供の頃、私の頭が匂った時、「臭い—。」となじってケラケラ笑ったり、大人になってからも、母の口臭を「あんたくち臭いぞ。」と指摘したりしていました。

私が精神を病むようになって部屋にとじこもってブツブツひとりごとを言うようになってしまった時も、となりの居間で、姉が母に、「なに？あの人…気持悪い…。」と言っているのが聞こえ、心がキズついたものです。

自分ではいっさい何もしくせに、私があと片づけで洗ったお皿を、「汚い！」と批判だけ

はするのです。

もえるゴミともえないゴミについても、「こんなことしたって誰も分別なんかしないよ。そんな業者にまかせときゃあいいんだよ。私なんか一度も分別したことなんかないぞ。」と、平気で言つてのける姉でした。

小学生の頃、私と二人で本屋の前を歩いていた時、通りすがりに私の目の前で平然と雑誌を万引きしたりしました。(私は心臓がとび出そうになるほどドキドキしましたが、姉が恐くて、とうとう注意することができなかつたことを、今でも悔いています。)

そんな不道德な、不誠実な姉に、反抗心をあらわにするようになった私は、「かわいくないねー!」と、ののしられたり、ぶたれてメガネがふつとんだりしたこともありました。

……そんな姉も、また、大嫌いで憎んでいました。

しかし姉も、年をとつて性格も丸くなり、私の精神の病気を理解して受け入れてくれるように変わってきました。

姉にひどい暴言を吐いたおわびに図書券を贈れば、「そんなことしなくていいんだよ。たあちゃんになるべくお金使わせたくないから自分で使いなよ。」と、氣遣つてくれるようになりました。

母が倒れてからも、一人暮らしで実家を離れている私にかわつて、姉はひとり洗たく物や着替えなどを運んで、山梨の病院まで行き来してくれています。それはそれは献身的で、何もしてない私は、頭の下がる思いです。

最後に父のことを書きたいと思います。

父はまったくの放任主義の人でした。

私と母と姉が、どんなに口汚くののしり合ってケンカしていようと、決して仲裁に入ること
も叱ることもせず、黙って自室に閉じこもってしまふような人でした。

「家庭のことにかかわると、次の日のつとめにさしつかえるから。」と、言っていました。

あまりにも家族にまったく無関心なゆえに、私が幼少の頃は、父がお父さんなのだという認識
が持てず、会社から帰宅してくる父を見ると（夜になると家に入ってくるこの男の人は、一体誰
なんだろう……？）と、よく疑問に思ったものでした。

小学校と駅が同じ方向だったので、一緒に歩く時、手をつなごうとして父の手をにぎろうと、
幼い手をさしのべると、いやがって、ぱっと手をふりはらわれたことは、今でも心のキズとなっ
ています。

しかし、そんな父も、私が大きくなってから聞いたことですが、当時は会社の仕事があまりに
も忙しすぎて、毎日遅くまでの残業に日曜も出勤と、それは大変だったそうです。父もへとへと
に疲れていたのでしょう……。

父は父で、家庭を支える為、骨身をけずって、くたくたに疲れ果てながら、毎日毎日、汗水た
らして一生懸命に働いてくれたのでした。

私のすることにひと言も文句を言うことなく、好き勝手にやりたいことをやらせてくれていた

父……。

こんなことも思い出します。

私が引きこもりをしていた頃、父と散歩をしていた時のことです。だれの家の敷地でもない道ばたに生えていたシソの葉を、私がつんでいるのに気づいた父は、みけんにシワをよせて、いやな顔をし「そういうことするもんじゃないよ。誰かの家の人の物かもしれないだろう。二度とこれからはそういうことしないようにな。」と、静かにさとすようにつぶやいたのでした。

か黙でまじめすぎるほどに誠実だった父……。

愛人を作って蒸発したおじさんを批難した時も、父は決して感情的にならず、「おじさんにも、おじさんにしかわからないやむを得ない事情があったかもしれないよ。」……と、言うのでした。その時は（何で？そんなの納得できないよ！）と、心の中でいきどおっていた私も、今、この年になってみて、やはり完全には許せないけれど、……仕方ないんだろうな……と、あきらめられるようになりました。

痴呆症の祖母が亡くなった時、祖母に対する憎悪ゆえにお葬式に出ない姉を、ひと言も批難したり、怒ったりしなかった父……。

昔、別の場所で一人暮らししていた頃、職場でのイジメや親友の裏切りなどによるストレスから、ひとり部屋で絶叫するようになってしまい、近隣に迷惑をかけ、大家さんから立ちのきを求

められ、すっかり気落ちして弱くなっている私を、責めることもなく、ただ黙ってぼんぼん……と、背中を軽くたたいてくれた父でした。

……こんな私の家族なのですが、社会の役に立つようなことは何も書けませんでした。この年になって、家族のありがたみをひしひしと感じている今日この頃です。

世の中にはいろんな家族がいます。

もつともつと悲惨で辛く、身体に虐待を受けたり、痛ましい暴力及び殺傷事件になるような家族も多いこと知りました。

そんな中で、今、心から愛することのできる家族を持たない私は、本当に恵まれた、しあわせ者だなあ……と、つくづく神に感謝している毎日なのです。